

## 現代アートの島「直島」

「清里」「伊豆諸島」「苗場」など、シーズンともなると、かつては若者たちで溢れかえる場所があった。ところが今日、若者が殺到するような旅行先はほとんど見当たらない。若年層の旅行に対する関心は低下し、旅行に費やす金額も大きく減少している。とりわけ、若年層男子の旅行参加率は同年代女子に比べて低い水準にとどまっている。旅行業界の将来を考えると、こうした若年層の旅行離れは深刻な問題となっている。

その一方で、一部の若い人々という限られた顧客層ではあるが、彼らによって熱いまなざしを向けられている場所もある。本ケースで取り上げる「直島」はその一つである。美術館を建てるだけでなく、現代アートを島全体に配置し、日本全国から旅行客を集めている。香川県の瀬戸内に浮かぶ小さな島は、どのようなマーケティングで若年層を呼び込むことに成功しているのだろうか。直島のマーケティングについて探ってみよう。

### 1. 瀬戸内に浮かぶ「直島」

直島（なおしま）は、香川県香川郡直島町に属する瀬戸内海の離島である。小さな島であるため、鉄道や飛行機の便はなく、船で渡らなければならない。香川県と岡山県からのアプローチが可能であり、船での所要時間は高松港（香川県高松市）からは約1時間、宇野港（岡山県玉野市）からは約20分である。船の便数は比較的多く、高松港からは6往復程度、宇野港からは1日20往復以上の便が出ている。離島といっても、決して隔離された場所ではない。

高松港あるいは宇野港までのアクセスも比較的良好だ。高松港はJR高松駅、宇野港はJR宇野駅とそれぞれ隣接しており、関東や関西などのエリアから飛行機や新幹線を用いれば容易に訪れることができる。さらに、東京から寝台特急を使用すれば、日帰りも可能であり、各地からの高速バスも多数存在する。

直島に来る観光客の目的は「現代アート」である。直島にはベネッセコーポレーションが中心となって手がけた美術館が複数存在しているが、美術品が設置されているのは美術館内にとどまらない。「家プロジェクト」と呼ばれる、島の空き家を改修した美術品群をはじめとして、島のいたるところに現代アート作品が置かれている。また、ベネッセによる宿泊施設「ベネッセハウス」内などにも多くの現代アート作品が展示されている。直島への来島者は年々増加傾向にあり、直島観光協会の発表によると、2008年の観光客数は年間34万人に達している。2003年までは年間5万人程度で推移していたが、2004年に地中美術館が開館して以降に急速に伸びた。

また、2010年に開催された瀬戸内国際芸術祭において、直島の入場者は、開催期間の105日間で約30万人に達し（実行委員会発表による）、大成功であった。直島は、今や香川県

の観光において大きな存在となりつつある<sup>1</sup>。瀬戸内国際芸術祭実行委員会によって、芸術祭期間中の来場者についての調査が実施されている。この調査は直島だけではなく、芸術祭来場者 11,476 名を調査対象とした結果であるが、来場者の約 7 割が女性であり、関東と関西からの来場者はそれぞれ 2 割（計 4 割）。香川県と岡山県からの来場者の計 4 割とほぼ同数である。年齢別に見ると、7 割が 10～30 代で、特に 20 代が 4 割を占めていた。芸術祭のコンセプトは基本的に直島の美術作品のコンセプトを拡張したもので、以上の数値は、直島への来島者のプロフィールに近いものと推測できる。関係者の実感としても、若年層の観光客が多い事が指摘されている<sup>2</sup>。

## 2. ベネッセによる取り組み

直島のマーケティングについて検討するとき、ベネッセを抜きに語ることはできない。直島の多くの施設は、株式会社ベネッセホールディングスおよびその関連財団である直島福武美術財団（以下ではベネッセと総称する）によって建設されているからだ。島内の美術品もほぼすべてがベネッセによって設置されている。島内の展示物は、一貫して「現代アート」が選ばれており、直島の代名詞にもなっている。直島とその周辺においてベネッセが展開しているアート活動は、「ベネッセアートサイト直島」と総称されている。

最初に建設されたのは 1989 年の「直島国際キャンプ場」である。このキャンプ場は、著名な建築家安藤忠雄氏が監修し、敷地内にはカレル・アペルの屋外彫刻「かえると猫」が現代アート作品として最初に常設された<sup>3</sup>。その後も、継続的に開発は行われており、1992 年にアート展示スペースを備えたホテル「ベネッセハウス」が安藤忠雄氏による設計によって開館した<sup>4</sup>。1998 年には、島のはずれ本村（ほんむら）地区において、空き家を利用した「家プロジェクト」が開始された。

「地中美術館」が開館したのは 2004 年である。地中美術館は直島の中核施設として建設され、以降、急速に来島者が増加している。それに合わせ、ベネッセハウスも数回にわたり拡張されている。2008 年には岡山県の犬島にも銅精錬所の遺構を保存・再生した美術館「精錬所」を、2010 年には香川県小豆群土庄町豊島（てしま）に、豊島美術館を設置するなど、近年は、直島以外の島への進出も始めている。主な施設については表のように整理できる。

ベネッセアートサイト直島には、一般的な美術館とは異なるいくつかの特徴がある。まず、島内の美術品が現代アートに統一されている点である。アートといっても様々なカテ

---

<sup>1</sup> 「香川県観光動態調査報告概要」によれば、香川県内の主要な観光地である、屋島、金比羅離宮、栗林公園入場者数は概ね年間 60 万人前後である。

<sup>2</sup> ただし、直島側の発言によると、若年層だけを意識して企画してきたわけではない。

<sup>3</sup> 国際キャンプ場は 2006 年に閉鎖された。

<sup>4</sup> 安藤忠雄氏は、地中美術館、李禹煥美術館など、直島におけるベネッセ関連の主要施設の設計を多く手がけている。

ゴリーがあるが、直島では現代アートという軸からブレない。次に、建築物や家プロジェクトからもわかるように、島を直接訪れなければ見たり体験したりできない点である。直島の美術品は地元結びついた作品が多く、移動することができない。さらに、「美術館」という一つの施設だけに作品が置かれているのではなく、島内全体に作品が置かれており、さながら、島全体が美術館のようになっていることも、大きな特徴といえよう。また、広報活動の制限も工夫されている。財団法人直島福武美術館財団広報担当の占部隆子氏によればメディア対策も徹底しており、メディアに対して写真の構図を制限するなど、コントロールをしている。例えば、一部の作品は、構図が制限され、ある方向から写した写真しか、メディアに掲載を許可しないとといった対応を取っている<sup>5</sup>。

表1 直島の主な施設と、開設年

年	施設	備考
1989	直島国際キャンプ場	2006年閉鎖
1992	ベネッセハウス開館	ホテル
1998	家プロジェクト開始	本村地区にて展開
2004	地中美術館開館	中核施設となる
2008	犬島アートプロジェクト「精錬所」開館	岡山県犬島へ進出
2009	直島先頭「I♥湯」営業開始	観光協会、自治会と協働を実施
2010	李禹煥美術館開館	
2010	豊島美術館の開館	香川県豊島に進出

出所：ベネッセアートサイト直島ホームページより作成

さらに、全体としてのコンセプトが明確化されている点である。このコンセプトは「普段見られない美術品が多い」という美術以外の部分にもおよび、アートサイト全体に徹底されている。例えば、ベネッセハウスの客室には全室テレビが設置されていない<sup>6</sup>。このコンセプトは福武総一郎氏の意図を受けて実施されており、直島福武美術館財団の金代氏も「完全にアンチ東京であり、東京とか大都市にない物を福武氏が設置しようとしている」と語っている。観光客数に比べると宿泊施設や飲食店も極端に少なく、通常の観光地とは程遠い印象を受ける。直島の観光客の多くが関東および関西という大都市から来ることを考えると、直島のこのコンセプトは直島の持つ風景などとともに、観光客が「非日常」を感じるのに十分であると考えられる。

### 3. アートの下地

直島町には、古くから三菱マテリアルの精錬所が基幹産業として存在している。そのた

<sup>5</sup> 来場者であれば、写真とは違う構図で作品を見ることもできる。

<sup>6</sup> テレビが見たい場合には、有料で借りることはできる。

め、観光協会は設立されたものの、現在に至るまで、さほど熱心に観光誘致に取り組んできているわけではない。NPO 法人直島観光協会事務局長濱口敏夫氏によれば、過去、直島町における観光誘致は町長による個人的な取り組みが多かったという。特に、1995 年まで連続 9 期 36 年もの長期にわたって町長を務めた三宅親連氏によるところが多く、藤田観光および福武書店の誘致も、当時の町長である三宅氏の主導によって行われた。

直島におけるアートに関係する取り組みの開始は古く、ベネッセの進出以前からアートを意識した公共建築物が建設されている。これは島民への税金の還元を意識していたからだという。直島町ホームページによると、最初に建設されたのは直島小学校である。直島小学校は当時の若手建築家石井和紘氏の設計によって 1971 年に竣工した（図 1）。その後も、石井氏の設計により幼稚園(1974 年竣工)、中学校（1979 年竣工）、直島町役場（1983 年竣工＝図 2）など多数にのぼる。これらの建築物は公共建築物としては大変奇抜である（直島町史より）。

観光客の増加に伴い、直島町の観光協会は 2003 年から案内業務を開始し、2008 年に NPO 法人となっている。現在は 2005 年に建設された「海の家なおしま」における案内業務を中心に、『直島銭湯 I♡湯（アイラブユー）』の経営なども行っている。この施設は、建設はベネッセ・グループが行ったが、運営を観光協会と地元の宮浦自治会が行っている。契約上は、ベネッセから無償で建物とアート施設を借り受け、運営する形となっており、管理人としては地元の人、特に高齢者を中心に雇用している。

近年で最も大きな取り組みは 2010 年 7 月 19 日から 10 月 31 日までに開催された「瀬戸内国際芸術祭」である。この芸術祭は香川県など、地元自治体を中心となって主催者<sup>7</sup>となり、直島のみならず、香川県の周辺の様々な島で開催された。直島福武美術館財団や直島町なども構成団体の 1 つであり、福武総一郎氏は総合プロデューサーに就任した。直島への来場者が最も多かったことなどからも、直島やベネッセアートサイト直島が中心的な開催地であったことがわかる。

図 1 直島小学校



出所：直島町ホームページより

<sup>7</sup>岡山県と岡山県内の自治体はオブザーバーとして参加している。

図2 直島町役場



出所：直島町ホームページより

#### 4. 変化しつつある直島

直島において、ベネッセによらない施設はもともと非常に少なく、2004年の時点で中心地域のひとつ「本村地区」（ほんむら）であっても、飲食店が全くない状態であった。ところが、2004年に「カフェまるや」が本村地区に開業されて以降、飲食店が少しずつ増えてきた。現在、本村地区、港がある「宮浦地区」など合わせて、20店強の飲食店が開業している。開業している飲食店のほとんどは、島外の人が開業した店である。業態も特徴的であり、いわゆる「カフェ」形式の店が非常に多く、ほとんどの店舗は住民から空き家を借りて営業しており、外見は民家そのものであることが多い。直島町観光協会の濱口氏によれば、現在も開業希望者は多いが、物件がない状態だという。

上記のような直島のカフェのスタイルは、直島本村地区で2004年に初めて開業した「カフェまるや」の影響が強い。同店は民家を借りて営業しているが、オーナー大塚ルリ子氏によれば、当初、「民家をそのまま使って出店をするというのは地元で驚かれた」という。直島観光協会の濱口氏も「従来は空き家でも、帰省してきた家族のために保持する住民が多かったが、近年は貸す人が増えている」と指摘している。

面白いスタイルのカフェも登場している。特徴的なのは香川大学の学生が運営する「和カフェぐう」である。このカフェは土日祝日のみの営業であり、香川大学の学生が運営の全てを自分達で行っている。これらのカフェの経営は総じて順調のようであり、「カフェまるや」の大塚氏も、周辺に競合するカフェが増えて尚、経営は順調であるとインタビューで答えていた。カフェどうしで連携し、広告を出すといった取り組みも実施している。

主要な宿泊地はベネッセコーポレーションが運営するホテルベネッセハウスだが、比較的ハイクラスであり、1泊1人2万円程度の宿泊代金が必要である。その下のクラスの宿は、小さな民宿や格安な宿泊施設がいくつかある程度である<sup>8</sup>。食事を提供がない宿や相部屋となる宿なども多く、どちらかという若者向けの施設である。そして飲食店同様、民家をそのまま宿泊施設として使用しているケースも多い。

<sup>8</sup> 2006年まではキャンプ場もあったが、当然季節に限られる。

## 5. 島民の観光に対する意識と反応

これまで説明した通り、直島における観光開発は、島外の者が中心に展開されている。また、島民も観光誘致にさほど熱心ではない。

一方で、島民が観光客に冷たい、というわけではない。島外から来た観光客のみならず、開業者などに対して非常に寛容である事が直島の特徴である。この観光客に対する人柄の良さはしばしば指摘されている。「船に乗り遅れそうになった際、港まで住民の車で送ってくれた」といった話や、道案内で親切にしてくれた、といった話が多く存在している。また、島では住民の自宅トイレを観光客に貸し出す活動「トイレ提供ボランティア」も広く行われている。

このような、観光に対する無関心と、観光客に対する優しさは筆者達が直島の関係者に対してインタビューを行った際も前述と類似したエピソードが多く聞かれた。また、島外から来た開業者に対しても寛容であり、「よそ者」を追いだそう、といった動きも表だって見受けられない

## 6. 若者の意識と直島の魅力

2011年2月に実施したマクロミル社のモニターを利用したインターネット調査の結果によると、直島への旅行の34.1%は日帰りであり、41%が1泊、残りの25%が2泊以上。宿泊をした人の45.7%は直島に泊まっており、民宿・ドミトリーを利用した人(24.5%)が、ベネッセハウス(17%)を上回っている。調査対象者は直島に行ったことがある、関東圏と関西圏に住む20~30代の男女208名であった(関東と関西は均等に調査した)。回答者の61%が女性で、75%が訪問回数は1回と答えている。

回答者が直島を知ったきっかけを複数回答で尋ねたところ、雑誌が43.8%で最も多く、インターネット関連も合計40%。また、クチコミも合計40%と高い割合である。「その他」としては、「地元だから」という回答や、友人、家族などの同行者として行ったという回答もあった。

「直島にまた行きたいですか」の問いに対して、9割以上は「非常にそう思う」「まあそう思う」と回答しており、また直島旅行の経験を他の人に話している。直島の魅力については、大半の人が美術関係を挙げているが、自然環境の美しさ、町並み、住民の態度に対しても比較的高い魅力を感じている。また、「魅力だと思うものはない」と答えた人は皆無だった。

さらに、直島の魅力で特徴的なことは、「船によるアクセス」というマイナスともみられがちな要素に対する肯定的な意見である。「船でしか行けない離島であること」に41.0%が「魅力的である」と答えている。さらに、直島へのアクセス方法が船しかないことについて自由回答で質問をしたところ、67.8%の人がポジティブに感じており、8.7%の人がネガティブにとらえていた。ニュートラルな層は15.9%だった。船でアクセスしなければ行

けないことは、直島にとってハンデではなく、むしろ魅力に繋がっていることになる。「フェリーに乗る機会なんてなかなかないし、あの時間はとても楽しみ。直島に向かうフェリーに乗るといつも、『ああ、来たなあ』と感じます（関東・20代・女性）」「陸続きだと、なんか特別感が減ってしまう（関西・30代・女性）」「船を使用しない現在において、日常とかけ離れている非日常を感じる。船でしか移動できないことは、特別な意味合いがあり、よいと思う（関西・30代・男性）」などの意見がみられた。

生活が豊かになり、今日の若者はさまざまな面で持たされている。かつてのように、自動車にあこがれたり、高級ブランド品を追い求めたりすることもなくなっている。従来よりも、自らのユニークな嗜好を重視する傾向にあることも指摘されている。これからの旅行産業では、若者たちのこうした意識や嗜好の変化を捉えていく必要がある。

## 7. 直島のマーケティング

直島に多くの若者が集まるようになったのは、実のところ、関係者が当初から意図した結果であるとは言い難い。直島での現地取材を行い、直島の各所を実際に訪れ、直島観光協会や直島福武美術館財団などにも取材を行った。関係者も「若年層の旅行者が多い」事実は口を揃えて認める一方で、「若年層は特に意識していない」とも語っている。実際に、若年層だけを意識して行われたマーケティング政策は確認できない。ベネッセハウスなどは宿泊料も食事代も比較的高価であり、中高年層をターゲットとしているとも考えられる<sup>9</sup>。

しかし、事実として若年層が集まっている以上、直島には若年層の旅行者を引きつける要素があるはずだ。その要素を整理できれば、若年層の旅行需要活性化策を検討する上で貴重な示唆を得ることができるだろう。

### 謝辞

NPO 法人直島町観光協会事務局長濱口敏夫氏、財団法人直島福武美術館財団事務局長金代健次郎氏、財団法人直島福武美術館財団広報担当占部隆子氏、カフェまるやオーナー大塚ルリ子氏、和カフェぐう（香川大学）佐藤裕衣子氏には、ご多忙の中インタビューにご協力いただいた。ここに記して謝意を表する。

設問1：若年層の旅行需要が低迷してきた要因について検討してください。

設問2：直島には多くの若年層旅行者が訪れています。若年層にとっての直島の魅力を整理してください。

設問3：他の観光地が若年層に対する魅力向上策を検討する上で、直島のケースからどのようなマーケティング上の示唆が得られますか。

---

<sup>9</sup>インタビューをした関係者からも「ベネッセハウスだけは若年層は多くない」との指摘を受けた。